

大阪学院大学

国際学論集

第30巻第1・2号 2019年12月

論 説

ケネス・G・B・デューワーとジュトランド論争(1)
..... 山口 悟—— 1

書 評

ウラジミール・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著
『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公（1904～1918年） 短い評伝』
..... 広野 好彦—— 31

会員業績..... 39

大阪学院大学国際学学会

ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争(1)

山 口 悟

Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (1)

YAMAGUCHI SATORU

ABSTRACT

Kenneth Gilbert Balmain Dewar is known as the co-author of 'Naval Staff Appreciation of Jutland' (hereafter cited as NSAJ). NSAJ had been completed in 1921 but was not published because it included harsh criticism on John R. Jellicoe who had commanded the Grand Fleet in the Battle of Jutland in 1916. The Admiralty was concerned that NSAJ would intensify the controversy about the Battle of Jutland.

However, NSAJ had a great influence on the Jutland Controversy. *Narrative of the Battle of Jutland* was published as the Admiralty official account of the Battle of Jutland in 1924. That was the expurgated version of NSAJ. Besides, Winston Churchill wrote *The World Crisis*, vol.3 by reference to NSAJ and on Kenneth Dewar's advice.

NSAJ was heavily influenced by Dewar's critical thinking about British naval doctrine, training and education system, and so on. To Dewar, Jellicoe was an embodiment of the Royal Navy's organization and system which Dewar had criticized. And also, Dewar had hold antipathy to Jellicoe through his personal experience in his naval career. Given his thinking and real experience, Dewar had enough background to criticize Jellicoe.

Dewar's personality, intellectual, but uncompromising, also influenced the harsh criticism of Jellicoe. Such his personality had also had an adverse effect on his naval career. In 1928, that was a contributing factor in the Royal

Oak incident, in which Dewar had come into conflict with his superior officer. Dewar had produced NSAJ living up to the expectations of David Beatty, the former First Sea Lord, and unwillingly retired from the Navy after the Royal Oak incident under the new First Sea Lord, Charles Madden. Madden had been on very familiar terms with Jellicoe and felt a repulsion toward NSAJ. It may be said that Kenneth Dewar was one of the victims who suffered through the Jutland controversy.

目 次

はじめに

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

B. ケネス・デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

2. ジウトランド海戦とジウトランド論争

A. ジウトランド海戦の概要

B. ジウトランド論争

(以上本号)

3. 「海軍幕僚評価」

A. 艦隊決戦の戦略的意義

B. ジウトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

おわりに

はじめに

第一次世界大戦最大の海戦である1916年のジウトランド（Jutland）海戦において、イギリス海軍はドイツ海軍の撃滅に失敗した。大戦後にイギリス海軍省により進められたジウトランド海戦公式記録の作成作業は、それが不満足な海戦結果の責任の所在を示唆するものとなりえたがゆえに難航する。これを契機として海軍内外でジウトランド海戦の結果責任をめぐる論争、いわゆるジウトランド論争が1920年代を中心に展開されることになる。

ジウトランド論争は、ジェリコー（John Rushworth Jellicoe）やビーティー（David Richard Beatty）などジウトランド海戦を司令官として戦った海軍軍人たち、またハーパー（John Ernest Troyte Harper）やコーベット（Julian Stafford Corbett）など、その海戦の公式記録作成に関わった者たちの人生や評価に影を落とした。「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告（Naval Staff Appreciation of Jutland）」〔以後は基本的に「海軍幕僚評価」と略記〕の共編者であるケネス・デュワー（Kenneth Gilbert Balmain Dewar）も、そうした影響を受けた人物の一人である¹⁾。

海軍省によるジウトランド海戦の公式記録は、1924年に公表の『ジウトランド海戦報告（*Narrative of the Battle of Jutland*）』であるが、それは「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版であった²⁾。「青年トルコ人（Young Turks）」と称される海軍改革派グループの一人として知られるケネス・デュワーは、軍令部長ビーティーの信任のもとに、「海軍幕僚評価」を作

1) 本稿では、「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」の基本テキストとして、大英図書館所蔵ジェリコー文書第54に所収の下記史料を利用する。以下においては文書名を「海軍幕僚評価」と略記する。[C.B.0938] Naval Staff Appreciation of Jutland (with Appendices and Diagrams), Copy No.7 (hereafter cited as NSAJ), Jellicoe Papers, vol. 54, Add MS 49042. これに加えて、下記に所収の「海軍幕僚評価」テキストも補足的に参照する。William Schleichauf and Stephen McLaughlin, eds., *Jutland: The Naval Staff Appreciation* (Barnsley: Seaforth Publishing, 2016).

2) *Narrative of the Battle of Jutland* (H.M.S.O., 1924) (hereafter cited as *Narrative*).

成した。この文書はジウトランド論争に影響を及ぼし、デュワーの名を知らしめることにもなったが、それは彼の人生に幸いしたようにはみえない。

本稿は、ケネス・デュワーを視角として「海軍幕僚評価」を検討する。彼と「海軍幕僚評価」との関係を通して、ジウトランド論争における「海軍幕僚評価」の位置づけを考え、そしてまたジウトランド論争が関係者に及ぼした影響をかいまみたいと思う。

なお、本稿でデュワーとはケネス・デュワーを意味し、人物の軍階級は各文章当時のものとする。

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

ケネス・デュワーは1879年にスコットランドで生まれた。1893年に海軍に入り、兵学校〔訓練施設・練習艦ブリタニア (HMS Britannia)〕で2年間の教育・訓練を受けた。兄アルフレッド (Alfred Charles Dewar) など彼の兄弟も、海軍軍人の道を歩んでいる³⁾。

1895年にデュワーは士官候補生 (Midshipman) として地中海艦隊 (Mediterranean Fleet) の防護巡洋艦ホーク (HMS Hawke) に乗組み、翌年には海峡艦隊 (Channel Fleet) の戦艦マグニフィセント (HMS Magnificent) へ配属となった。その後、練習戦隊のコルベットであるヴォラージ (HMS Volage) へ移り、1899年に少尉 (Sub-Lieutenant) へと昇進した⁴⁾。

3) ケネスの兄アルフレッド (1876-1969) は大佐に、ジウトランド海戦で戦艦ハーキュリーズ (HMS Hercules) に乗組んでいた弟アラン (Alan Ramsay Dewar, 1887-1972) は少将まで昇った。もう一人の弟ジェームズ (James Forest Dewar, 1881-1942) も海軍に入ったが、軍務に適さず第一次世界大戦中に少佐で退役となった。'Alan Ramsay Dewar,' and 'James Forest Dewar,' *The Dreadnought Project*, <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/Alan_Ramsay_Dewar> and <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/James_Forest_Dewar>.

4) Issue 27172, *The London Gazette*, 9 Mar. 1900, p. 1630. デュワーの自伝では1900年とされているが、1899年の誤りであろう。Kenneth Gilbert Balmain Dewar, *The Navy from Within* (London: Victor Gollancz, 1939), p. 42.

さらにグリニッジ、ポーツマスの教育・訓練施設で課程を修め、1900年に大尉（Lieutenant）へと昇進したデュワーは、デヴォンポート小艦隊（Devonport Flotilla）の駆逐艦オスプレイ（HMS Osprey）、同じく駆逐艦ファークヴェント（HMS Fervent）、演習参加のため駆逐艦シャーク（HMS Shark）と短期間に乗艦を変えている⁵⁾。次に彼は東インド戦隊（East Indies Station）所属の二等巡洋艦マラソン（HMS Marathon）乗組みとなり、義和団事件に対応すべく中国へも分遣されたが、到着のころにはもう大勢は決していた。マラソンはインド洋へと帰還し、セイロンやペルシア湾などで活動した⁶⁾。

1901年からデュワーはグリニッジで、さらにポーツマスの砲術学校で砲術の専門課程に学び、優秀な成績を修めて、以後、砲術士官の道を歩んでいくことになる⁷⁾。1903年の演習の際には、駆逐艦マーメイド（HMS Mermaid）において早くも初の艦長職を経験している。

その後、デュワーは、シーアネス（Sheerness）砲術学校に要員として配属となった。ここで彼は、概ね午後4時までには仕事が終わるという職場環境ゆえの余暇時間を利用して自学自習に励み、海軍を狭い技術面からのみではなく作戦面からみる広い視野を養うとともに、海軍の教育・訓練面の改善を志向するようになっていった。こうした変化には、王立防衛研究所（Royal United Service Institution）の1903年金賞論文を著述した兄アル

本稿でのケネス・デュワーの経歴についての記述は、基本的上記自伝と、補足的に下記ガーディナーの研究による。Leslie Gardiner, *The Royal Oak Courts Martial* (Edinburgh; London: William Blackwood & Sons, 1965), chap. 5, pp. 64-88.

5) Dewar, *Navy from Within*, p. 48.

6) クウェートに停泊中のマラソンには、クウェートの首長ムバーラク（Mubarak bin Sabah Al-Sabah）とともに、当時彼の保護下にあった、のちの初代サウジアラビア国王イブン・サウド（Abdulaziz bin Abdulrahman bin Faisal Al Saud）が訪問している。Ibid., p. 55.

7) Barry Dennis Hunt, *Sailor-Scholar: Admiral Sir Herbert Richmond 1871-1946* (Waterloo, Ontario: Wilfrid Laurier University Press, 1982), p. 29. ポーツマスのホエール島（Whale Island）にある砲術学校は、HMSエクセレント（HMS Excellent）、またはポーツマス砲術学校とも称された。

フレッドの知的活動や日露戦争への関心が刺激になっていたという⁸⁾。

1904年の演習で再び駆逐艦マーメイドを指揮したあと、デュワーは海峡艦隊の装甲巡洋艦ケント (HMS Kent) の砲術士官に任命された。一時、予備に配された後、ケントは中国戦隊 (China Station) 配属となって1906年には香港へと進んだ。デュワーは中国戦隊にある間に、旅順やウラジオストック、また、たびたび日本にも訪れている。日本では江田島の海軍兵学校を訪ね、東京で東郷平八郎大将との会話の機会を得たりするなど日本海軍と交流をもち、それらの経験はイギリス海軍の教育・訓練や指揮統制面の改良について彼が思考を深める糧となった⁹⁾。

デュワーは、装甲巡洋艦ケントにて砲撃能力向上に成果を残して評判も得た¹⁰⁾。次いで彼は1908年にポーツマス砲術学校付となったあと、本国艦隊 (Home Fleet) の戦艦プリンス・ジョージ (HMS Prince George) 乗組みとなった¹¹⁾。そこでも彼の砲撃能力改善への貢献が認められている¹²⁾。

このころ彼は日本海軍に関する知見をかわれて、それについて海軍大学 (Royal Naval War College) で講義する機会をもっている。しかし、海軍省改革につながる話へ至ったときに校長のローリー (Robert Swinburne Lowry) 少将により、「海軍大学は海軍省の批判をする場ではない」として、中断させられたという¹³⁾。

8) Dewar, *Navy from Within*, pp. 68-69. アルフレッド・デュワーの金賞論文は下記のものである。Lieutenant A. C. Dewar R.N., "In the Existing State of Development of Warships, and of Torpedo and Submarine Vessels, in What Manner Can the Strategical Objects, Formerly Pursued by Means of Blockading an Enemy in His Own Ports, Be Best Attained?," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 48-314, 315 (Apr. and May 1904).

9) Dewar, *Navy from Within*, pp. 78-80, 84-85, 88-89, 90-96.

10) *Ibid.*, pp. 72-74, 81, 87-90, 97-99; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 71-72.

11) "Naval and Military Intelligence," 15 Jan. 1908, *The Times* (London), p. 8.

12) Dewar, *Navy from Within*, p. 104; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 72.

13) Dewar, *Navy from Within*, pp. 104-107; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 73-74; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 29. ハントはこの講義を1909年のこととしているが、1908年ではないかと思われる。この講義内容は、海軍省批判ととられうる部分を削除したうえで文書化され、海軍部内で回覧されることになった。これに対し、南極探検での悲劇的最期で知られるスコット (Robert Falcon Scott) 大佐からも手紙にて好意的反応がデュワーに伝えられている。

デュワーは、またポーツマス砲術学校付となったのち、1909年に海峡艦隊の戦艦コモンウェルス（HMS Commonwealth）に乗組んだ¹⁴⁾。次いで短期間のポーツマス砲術学校付と演習での防護巡洋艦スパルティエイト（HMS Spartiate）配属を経て、砲術演習監察官（Inspectors of Target Practice）のパーズ（Richard Henry Peirse）少将の幕僚に任命された¹⁵⁾。彼はマルタ島などに出向いて各艦隊の砲撃能力改善にあたっている。

1910年にデュワーは、革命的戦艦として有名な戦艦ドレッドノート（HMS Dreadnought）乗組みとなり、艦長のハーバート・リッチモンド（Herbert William Richmond）大佐と親交を結んで、以後、彼に親炙することになる。リッチモンドは海軍改革を志して活動し、のちには海軍史家として名を馳せることになるイギリス海軍の代表的知性派軍人であった。なおデュワーは、配属されて早々に偽エチオピア皇族がドレッドノートを視察訪問するという事件（Dreadnought Hoax）に遭遇している¹⁶⁾。

1911年に中佐（Commander）へ昇進したデュワーは、ポーツマスの海軍大学の教官に配された。そこで彼は海軍戦術の研究を進め、長大な単縦陣ではなく艦隊を数個の分艦隊（Division）に分けての柔軟な分艦隊戦術（Divisional Tactics）、下級指揮官の指揮権限の拡大とその自発的指揮の重視等の戦術思考を強めるようになっていった。本国艦隊で演習を観察した経験などから、そうした戦術の望ましさを彼は考えるようになったとい

14) “Naval and Military Intelligence,” 12 Dec. 1908, *The Times* (London), p. 4; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 74. 自伝では戦艦コモンウェルス配属が1909年の末とされているが、誤りであろう。デュワーの自伝には、いくつか時期の表記に混乱がみられる。Dewar, *Navy from Within*, p. 107.

15) “Naval and Military Intelligence,” 14 June 1909, *The Times* (London), p. 8; Dewar, *Navy from Within*, pp. 111-12.

16) Dewar, *Navy from Within*, pp. 120-21. ドレッドノート欺瞞事件（Dreadnought Hoax）である。ホレス・ド・ヴィアー・コール（William Horace de Vere Cole）を首謀者とする6人がエチオピア皇族一行に変装して戦艦ドレッドノートを訪問し、その後、事の顛末を『デイリー・ミラー（*The Daily Mirror*）』紙などへ知らせたため、海軍は面目を失った。偽エチオピア皇族の一行に扮した者のなかには、のちの作家ヴァージニア・ウルフ（Adeline Virginia Woolf）であるヴァージニア・ステイヴン（Stephen）も含まれていた。参照、種村季弘『詐欺師の楽園』（岩波書店、2003年）、8～21頁。

う¹⁷⁾。また、彼は対独戦を想定した海軍戦略にも関心を深めて、仮想敵国ドイツに対する遠隔封鎖の検討を進め、それは王立防衛研究所の1912年金賞論文に結実した¹⁸⁾。

1912年に海相ウィンストン・チャーチル (Winston Leonard Spencer Churchill) の主導で海軍参謀部 (Admiralty War Staff) が成立した。これに伴い海軍大学に設置されることになった参謀課程 (War Staff Course) の内容整備にデュワーは関わったが、専門技術面に偏重した課程内容には不満だった¹⁹⁾。

このころリッチモンドの主導下に、海軍の諸問題に関する思考を深め、海軍改革の基となる組織をつくろうとする動きが生じ、これにデュワーも参画した。1912年10月にリッチモンド、デュワー、レジナルド・プランケット (Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett) 中佐など、海兵隊将校を含む7人が第1回会合をおこなって海軍協会 (The Naval Society) が設立されることになり、翌年2月には会誌『海軍評論 (The Naval Review)』第1巻第1号が出版された²⁰⁾。この会合参加者は、そのうち4人がデュ

17) Dewar, *Navy from Within*, pp. 121-24, 133-38.

18) *Ibid.*, pp. 144-52. デュワーの1912年金賞論文は下記のものである。Commander K. G. B. Dewar R.N., "What Is the War Value of Oversea Commerce? How Did It Affect Our Naval Policy in the Past and How Does It in the Present Day?," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 57-422 (Apr. 1913).

この論文の最終章は具体的な作戦構想を取り扱っているがゆえに、海軍省の意向により出版されなかった。この未公表部分は、彼の自伝に付録 (Appendix I: Naval War Plan) として収録されている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 371-81.

19) Dewar, *Navy from Within*, pp. 152-54. 参謀課程の設置については下記を参照。Harry Dickinson, *Wisdom and War: The Royal Naval College Greenwich 1873-1998* (Farnham: Ashgate, 2012), pp. 109-10; Andrew Lambert, "The Naval War Course, Some Principles of Maritime Strategy and the Origins of 'the British Way in Warfare'," in *The British Way in Warfare: Power and the International System, 1856-1956*, eds. Keith Neilson and Greg Kennedy (Farnham: Ashgate, 2010), pp. 246-49.

20) この会合の参加者は以下の7名である。リッチモンド大佐、デュワー中佐、プランケット中佐、トーマス・フィッシャー (Thomas Fisher) 大尉、ヘンリー・サースフィールド (Henry George Thursfield) 大尉、ロジャー・ベレアーズ (Roger Mowbray Bellairs) 大尉、エドワード・ハーディング (Edward W. Harding) 海兵隊大尉。以上の者にヘンダーソン (William Hannam Henderson) 大将〔退役〕を加えた8名が、この会の創設者に数えられる。James Goldrick, "The Founders," in *Dreadnought*

ワーも関わって設置された参謀課程の受講者であり、彼が中心に選んだ者たちといえた²¹⁾。『海軍評論』の刊行は現在に至るまで継続されているが、第一次世界大戦の開始以降には、その内容が機密に触れる恐れありとして海軍省による出版停止や検閲も経験している²²⁾。

デュワーは、1913年の演習の際、一時的に本国艦隊司令長官キャラハン（George Astley Callaghan）大将の幕僚として戦艦ネプチューン（HMS Neptune）に乗艦した。その後、海軍大学から転じて、第二艦隊の戦艦プリンス・オブ・ウェールズ（HMS Prince of Wales）の副長に任じられた²³⁾。

1914年に、デュワーは海軍参謀部長（Chief of the Admiralty War Staff）のスターディー（Frederick Charles Doveton Sturdee）中将から、参謀部で彼を補佐してくれないかとの誘いを受けた。デュワーも大いに乗り気であったが、結局、これは実現をみなかった。彼は、この不成就を海軍大学での元同僚による妨害のためと考えている²⁴⁾。

1914年7月末にデュワーはガートルード・ステープルトン・ブレサートン（Gertrude Mary Stapleton-Bretherton）と結婚した²⁵⁾。結婚式での花婿介

to Daring: 100 Years of Comment, Controversy and Debate in the Naval Review, ed. Peter Hore (Barnsley: Seaforth Publishing, 2012), pp. 1-11.

各人の階級はThe Naval Reviewホームページ (<https://www.naval-review.com/about-the-naval-review/>) に基づいているが、デュワーの自伝では、トーマス・フィッシャーを中佐、サースフィールドを少佐とし、また、この会合出席者としてベレアーズの名が抜け落ちている。Dewar, *Navy from Within*, p. 155n.

21) Dewar, *Navy from Within*, pp. 154-55; Goldrick, "The Founders," p. 1; idem, "The Irresistible Force and the Immovable Object: The Naval Review, the Young Turks, and the Royal Navy, 1911-1931," in *Mahan Is Not Enough: The Proceedings of a Conference on the Works of Sir Julian Corbett and Admiral Sir Herbert Richmond*, eds. James Goldrick and John Brewster Hattendorf (Newport, Rhode Island: Naval War College Press, 1993), p. 87.

22) Dewar, *Navy from Within*, pp. 203, 263-64. 『海軍評論』の展開については下記を参照。Goldrick, "The Irresistible Force."

23) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 77.

24) Dewar, *Navy from Within*, pp. 159-60.

25) デュワーの妻の姉イヴリン（Evelyn Mary Stapleton-Bretherton）は、結婚によりワールシュタット公妃となり、第一次世界大戦中のドイツでの体験を記した『ベルリンのイギリス人妻（*An English Wife in Berlin* [1920]）』の作者として知られる。

添人はプランケット中佐が務めることになっていたが、大戦勃発直前の状況により彼は休暇をとれず参会できなかった。

1914年8月に第一次世界大戦がはじまると、デュワーの乗る戦艦プリンス・オブ・ウェールズも海峡艦隊に所属して大陸派遣軍の輸送防護などの任務に就き、翌年にはダーダネルス（Dardanelles）作戦のため地中海へと派遣された。上陸部隊を支援すべき艦砲射撃の不満足な展開をみて、デュワーは観測員を派出しての間接砲撃を提案したが、その即座の採用はみられなかった²⁶⁾。プリンス・オブ・ウェールズは、イタリア参戦後にはその支援のため、タラントを拠点とすることになった。

1915年秋にデュワーはデヴォンポート砲術学校の長となり、イギリス海軍予備員（Royal Naval Reserve）やイギリス海軍志願予備員（Royal Naval Volunteer Reserve）を含む将兵の訓練にあたった²⁷⁾。翌年に彼は、ドーバー哨戒隊（Dover patrol）のモニターのマーシャル・ネイ（HMS Marshal Ney）、次いでヤーマス防衛にあたるモニターのロバーツ（HMS Roberts）を指揮した²⁸⁾。

1917年5月に軍令部長ジェリコーの呼び出しを受けてデュワーは海軍省に入り、作戦課（Operations Division）に配属となって、戦時内閣のための戦況の週間評価報告書を作成する任務に就いた。同年7月には作戦課に計画班たる第16班（Section 16）が設置され、その業務にも彼はあたることになる。第16班は積極策を望む戦時内閣の圧力のもとに、攻勢計画を検討、策定すべく設置されたものであった。実はデュワーは、その設置より少し前に首相ロイド・ジョージ（David Lloyd George）と昼食をともにして海軍省改革などを論じる非公式な機会を与えられており、それも第16班設置に影響していたかもしれない²⁹⁾。

26) Dewar, *Navy from Within*, pp. 183-85.

27) デヴォンポート砲術学校は、HMS ヴィヴィッド（HMS Vivid）とも称された。

28) ロバーツでは、『闇の奥（Heart of Darkness）』などの作品で知られる小説家ジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）の来訪を受けている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 211-12.

29) Dewar, *Navy from Within*, pp. 230-31; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71; Arthur Jacob Marder, *From the Dreadnought to Scapa Flow* (hereafter cited as *FDSF*), vol.4 (London, New

彼自身の見解も含む週刊評価報告書は幾度もの修正を強いられてデュワーは不満に感じていたが、8月に修正前のものが海相ゲッデス（Eric Campbell Geddes）の目に届く機会を得て彼の意見を知らしめることができた。その後、デュワーは週間評価報告書の作成任務を解かれることになって喜んだものの、突然に東インド戦隊の防護巡洋艦サファイア（HMS Sapphire）への転属を指示された。まだ海軍省に入って3か月程での異動であり、彼はこれを左遷だと感じた³⁰⁾。週間評価報告書の内容やそこのデュワーの提案について軍令部長ジェリコーは度々異議を唱えて修正を命じており、自身の考えを表明するデュワーはジェリコーに疎まれていたと感じていた。この異動に反発したデュワーは人を介して首相に働きかけ、海相にも面談して、その取り消しに成功した³¹⁾。

9月に第16班は作戦課から独立して計画課（Plans Division）となり、デュワーもそこに所属することになった。当時、最も喫緊の課題はドイツ潜水艦による通商破壊戦への対策であった³²⁾。しかし、ジェリコーは船団護衛（Convoy）方式の採用問題などで首相と海相の信頼を得られず、1917年末に軍令部長を解任され、それを軍令部次長だったウィームズ（Rosslyn Erskine Wemyss）中將が後継することになった。こうした変化

York, Toronto: Oxford University Press, 1969), p. 195.

第16班設置の背景には、リッチモンドの首相ロイド・ジョージへの影響もあった。デュワーは、大戦前の参謀組織についての講義からロイド・ジョージに名が知られたのかもしれないとしているが、リッチモンドを通して知られていたのかもしれない。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 78-79.

30) Dewar, *Navy from Within*, pp. 221-24; Arthur Jacob Marder, *Portrait of an Admiral: The Life and Papers of Herbert Richmond* (London: Jonathan Cape, 1952), p. 267.

防護巡洋艦サファイアは、そのときボイラー故障でコロンボ港に留まったままの状態であったという。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71.

31) Dewar, *Navy from Within*, pp. 224-25. デュワーはこの異動を回避すべく、妻に手紙をもたせて、首相友人の教育院政務官ハーバート・ルイス（John Herbert Lewis）に働きかけた。

32) デュワーは大艦隊（Grand Fleet）所属の駆逐艦や潜水艦等を利用しての積極的な対潜作戦を構想していたが、戦力や即応性の低下を嫌う大艦隊側は、それに否定的だった。Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 77, 88; Marder, *FDSF*, vol. 4, p. 290. cf. Dewar, *Navy from Within*, pp. 233-38.

の下、デュワーは1918年に計画課長補 (Assistant Director of Plans) となる。

3月末にデュワーは大艦隊 (Grand Fleet) 司令長官だったビーティー大將心得と初めて面談する機会を得ている³³⁾。その後、アドリア海における作戦に関するローマでの会議にイギリス海軍代表として参加した。6月末に彼は大佐へと昇進した。

第一次世界大戦終結後、1919年にデュワーはイギリス代表団の一員としてパリ講和会議に参加し、のちこの功勞により大英帝国勲章 (CBE) を受勲した。講和会議の機会に彼は、大戦中のアラブ反乱 (Arab Revolt) での活躍で有名なトーマス・ロレンス (Thomas Edward Lawrence) 大佐に出会い、強い印象を受けている³⁴⁾。

このころ大戦による中断から再始動していた海軍大学 (Royal Naval College) にあったドラックス (Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Drax) 大佐から、そこでの勤務に誘われてデュワーは喜んだが、結局、それは実現しなかった³⁵⁾。この折に彼は、自主独立した思考をなすという自らの評判が軍歴の上での障害をもたらしていると感じたという³⁶⁾。さらに彼が関わった計画課の人事問題のこじれから、デュワーは黒海で白軍支援にあたっていた旧式巡洋艦グラフトン (HMS Grafton) の艦長へと異動させられそうになった。結局、この左遷の動きは計画課長のフラー (Cyril Thomas Moulden Fuller) 大佐や軍令部次長のおかげもあって回避できたものの、この苦い経験がデュワーに海軍での将来に疑問を抱かせ、退役を考えさせるようになった。1920年に、彼はとりあえず休職 [半給]

33) Dewar, *Navy from Within*, pp. 244-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 88.

34) Dewar, *Navy from Within*, pp. 254-56, 62. 元来は考古学者であって軍人ではないロレンスの活躍は、デュワーにとって、戦史研究を軽視し、自ら考える姿勢を育まない海軍の教育・訓練の不備を反省させる一例となった。

35) プランケットは1916年に母の遺産とともに、Erle-Draxの姓も受け継ぐことになり、Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Drax となった。本稿でも1916年以後は彼をドラックスとする。

36) Dewar, *Navy from Within*, p. 256. cf. Robert L. Davison, "Striking a Balance between Dissent and Discipline: Admiral Sir Reginald Drax," *The Northern Mariner/Le Marin du Nord*, 13-2 (Apr. 2003), pp. 48-49.

という選択に至る³⁷⁾。

こうした状況下に、当時、海軍省の訓練・幕僚業務課（Training and Staff Duties Division）にあった兄アルフレッドより求められたのが、「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」作成作業への参加であった³⁸⁾。この「海軍幕僚評価」は1921年末に完成するが、それとケネス・デュワーとの関わりについては後述する。

のち1922年にデュワーは、北アメリカ・西インド戦隊（North America and West Indies Station）の軽巡洋艦カルカット（HMS Calcutta）艦長に任命され、北米、カリブ海方面の各地を任務で訪問している。同年夏にカルカットは戦隊司令官パケナム（William Christopher Pakenham）大將の旗艦とされた。1923年にデュワーは同戦隊の軽巡洋艦ケープタウン（HMS Capetown）に乗艦を移して指揮を執ることになった。メキシコでのデ・ラ・ウエルタ（Felipe Adolfo de la Huerta Marcor）の反乱事件に際しては、1924年に戦隊司令官ファーガソン（James Andrew Fergusson）中將の指示を仰ぐことなく製油所のあったミナティラン（Minatitlan）に進出して、英米国民の保護にあたった³⁹⁾。

1924年にデュワーは海軍大学の戦争課程（War Course）を受講した。彼は海軍大学に勤務する期待をもっていたが、実現しなかった⁴⁰⁾。翌1925年には海軍省にもどって情報課次長（Deputy Director of the Naval Intelligence）に就任し、些末な問題処理に忙殺されがちな業務の改善に努めている⁴¹⁾。

1927年にデュワーは地中海艦隊第1戦艦戦隊旗艦の戦艦ロイヤル・オー

37) Dewar, *Navy from Within*, pp. 257-58, 264; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 106.

38) アルフレッド・デュワーは1917年に情報課、1918年以降には訓練・幕僚業務課に属して海軍省にあった。1918年に大佐に昇進し退役。のち1926年から1948年まで戦史班の長を務めた。‘Alfred Charles Dewar,’ *The Dreadnought Project*, <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/Alfred_Charles_Dewar>.

39) Dewar, *Navy from Within*, pp. 290-92. 当初、ファーガソン中將は未測量の水路を通っての進出をよくは思わなかったが、のちにデュワーの自発的行動を追認したという。

40) *Ibid.*, p. 296.

41) *Ibid.*, pp. 296-97.

ク (HMS Royal Oak) 艦長に就任した。彼は戦隊の副司令官コラード (Bernard St. George Collard) 少将と正常な関係を築くことができず、ロイヤル・オーク副長のダニエル (Henry Martin Daniel) 中佐とともに、コラードと対立する状況に陥った。デュワーとダニエルがコラードの言動に抗議する書面を上官へ呈したことをきっかけに問題が大きくなり、彼らは軍法会議にかけられるまでに至った⁴²⁾。このロイヤル・オーク事件は、社会に注目され、新聞や議会でもとり上げられた⁴³⁾。デュワーは自らの正当を強く主張したが、一部有罪とされて譴責された。しかし、彼は、コラードとダニエルが退役に追い込まれたのとは違って、まだしばらくは現役でありつづけることになった。

1928年秋にデュワーは砲術訓練任務にあった巡洋戦艦タイガー (HMS Tiger) の、翌1929年には同様の戦艦アイアン・デューク (HMS Iron Duke) の艦長に任じられた。また海軍侍従武官 (Naval Aide-de-Camp) にも任命された。しかし、同年、少将に昇進して退役⁴⁴⁾。結局、デュワー

42) ロイヤル・オーク事件については下記を参照。Ibid., pp. 312-54; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*; Robert Glenton, *The Royal Oak Affair: The Saga of Admiral Collard and Bandmaster Barnacle* (London: Leo Cooper, 1991); Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 172-75.

43) 議会でこの問題を取り上げた保守党の庶民院議員カーライオン・ベレアーズ (Carlyon Wilfroy Bellairs) 中佐〔退役〕はリッチモンドの古くからの友人であったことから、ともに彼との友人関係でつながるデュワーとベレアーズが連携し、故意に報道界を刺激して社会にこの事件を知らせ、海軍省を動揺させようとしているという噂が生じた。第二次世界大戦後、地中海艦隊司令長官としてロイヤル・オーク事件に関わったキース (Roger John Brownlow Keyes) 元帥の伝記がアスピノール・オグランダー (Cecil Faber Aspinall-Oglander) により著されたが、そこにこの噂が記載されていたことから、デュワーはそれを事実無根として名誉棄損を訴え、裁判において彼の主張が認められている。ちなみに、「青年トルコ人」の一人であったケンウォーシー (Joseph Montague Kenworthy) は、ロイヤル・オーク事件当時、労働党庶民院議員であり、ベレアーズと同じくその事件を議会でとり上げている。ケンウォーシーは、のちの第10代ストラボギー男爵 (Baron Strabolgi) である。Cecil Faber Aspinall-Oglander, *Roger Keyes: Being the Biography of Admiral of the Fleet Lord Keyes of Zeebrugge and Dover* (London: Hogarth Press, 1951), p. 305; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 223-24, 242-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 173-74.

44) ケンウォーシーはデュワーのために首相や海相へ働きかけをおこなったが、彼の退役は避けられなかった。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 175.

は、ロイヤル・オーク事件の影響から逃れることができなかった。

のち、デュワーは1931年の総選挙に労働党候補として出馬したが、落選した⁴⁵⁾。彼は、海軍軍縮が展開された戦間期において、主力艦の小型化を主張している⁴⁶⁾。1934年に中将〔退役〕に昇進。1939年には自伝 (*The Navy from Within*) を出版した。

第二次世界大戦では、兄アルフレッドのもとで海軍省の訓練・幕僚業務課戦史班に勤務した。第二次世界大戦後もデュワーの知的活動は衰えず、ダーダネルス作戦やジウトランド海戦についての論説を『海軍評論』に寄稿するなど海軍問題について見解表明をつづけている⁴⁷⁾。1964年に死去。

B. ケネス・デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

経歴からうかがえるように、デュワーは知性と行動力を兼ね備えた海軍軍人であった。兄アルフレッドやリッチモンドに影響を受けて、ケネス・デュワーも作戦・戦略面での考究をおこない、たとえば王立防衛研究所の1912年金賞論文にその成果をみることができる。また海軍協会の結成と『海軍評論』にも関わるデュワーは、リッチモンドには及ばなかったとしても、当時のイギリス海軍を代表する知性派軍人の一人であった。

デュワーの知的活動には、それに基づいた積極的行動が伴っていた。砲術士官として装甲巡洋艦ケント等で砲撃能力向上に貢献し、「青年トルコ人」の一人として第一次世界大戦以前から海軍改革運動にも関わり、大戦中の海軍省では攻勢計画を提言している⁴⁸⁾。「青年トルコ人」グループは1917年から首相ロイド・ジョージに接触するなどして海軍省の改革を促

45) デュワーは次回の選挙にも立候補を考えていたが、対立する保守党候補に、かつての上官であったキース元帥が出馬したことで立候補をとりやめたという。次回選挙ではキースが勝利した。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 226-28; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 169, 171; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 208-209.

46) "Opening of Navy Week To-Day: Exhibition of Pictures in London," 5 Aug. 1933, *The Times* (London), p. 15; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 228.

47) Kenneth Gilbert Balmain Dewar, "Battle of Jutland," I-III, *The Naval Review*, 47-4, 48-1, 2 (Oct. 1959, Jan. and Apr. 1960); idem, "The Dardanelles Campaign," I-III, *ibid.*, 46-2, 3, 4 (Apr., July and Oct. 1957); Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 230.

48) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 77, 87; Marder, *Portrait of An Admiral*, pp. 303-304.

し、ジェリコーの軍令部長解任にも影響を与えたが、デュワー自身も首相と会談して海軍省の現状と改革の必要を訴えている⁴⁹⁾。また、彼は、メキシコでのデ・ラ・ウエルタの反乱の際には司令官の指示を待たずに行動して積極果断を示している。

デュワーは外見上、静かで目立たない、控えめな、または印象の薄い人物であったともいわれる。しかし、知性的であるがゆえにか、自ら恃むところの厚い、反権威主義的で、知性に劣ると思う者に対し尊大な態度で接する狭量な性格をもつ、傲慢で自信過剰な不平家とみられがちであったことも否定できない⁵⁰⁾。その彼の性格と姿勢、そして自主独立した知性に基づいた積極的行動が、海軍改革運動において反発も惹起し、彼の軍歴の上で障害を招く一因ともなって、ついにはロイヤル・オーク事件での挫折につながったということもできよう。そうした彼の人生で負の方向に反作用した出来事のなかに、反発を招いた「海軍幕僚評価」の作成も含まれるだろう。

デュワーは、海軍の教育・訓練に最も関心を置いており、自伝でも「海軍を去るにあたって心からの唯一の後悔は、士官の教育・訓練に実際の影響を及ぼしたいとの願いがかなわなかったことである」と述べている。彼は10代半ばでの海軍入り以来、グリニッジなど各種施設で教育・訓練を受け、また教官としてもそれに関わってきたが、特に砲術士官としての専門教育を受けて以降、海軍の教育・訓練へ批判的な目を向けるようになったという⁵¹⁾。第一次世界大戦中にも、彼は海軍省にあって教育・訓練面での改革を説いていたようである⁵²⁾。デュワーは、その面における欠陥が第一

49) Robert L. Davison, *The Challenges of Command: The Royal Navy's Executive Branch Officers, 1880-1919* (Farnham: Ashgate, 2011), pp. 238-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 62-67.

50) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 68, 82-83; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 20-21; Goldrick, "The Founders," p. 9; Arthur Jacob Marder, *From the Dardanelles to Oran: Studies of the Royal Navy in War and Peace 1915-1940* (London; New York: Oxford University Press, 1974), pp. 58-59; idem, *FDSF*, vol.4, p. 135; idem, *FDSF*, vol.5 (London, New York, Toronto: Oxford University Press, 1970), p. 299; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 244.

51) Dewar, *Navy from Within*, p. 355.

52) Marder, *Portrait of An Admiral*, pp. 277-78.

次世界大戦での海軍の苦戦へと影響したと考えていた。

デュワールの批判の要点は、上官と規則への服従を当然とする抑圧された環境下に与えられる専門技能育成に偏重した教育・訓練が、海軍士官の創造性や積極性・自発性（initiative）の成長を阻害し、権限と情報を独占する高級指揮官の独断により機能する、過度の中央統制（over-centralisation）を特性とした組織に海軍を陥らしめているというものである⁵³⁾。これが戦術思想面では、艦隊司令官により単独で指揮・統制される単縦陣を基礎に置く硬直した艦隊戦戦術につながっている。また上官が絶対的・独断的存在となって、情報や権限を分有すべき参謀組織の発展を阻害しており、この参謀組織の欠陥・未熟もまた、司令官に権限が集中する過度の中央統制につながっているのであった⁵⁴⁾。さらに戦史研究の不十分・軽視が、戦略・作戦構想面での不備をもたらしめている。デュワールは、士官の主要責務たる指揮に関係した、責任負担を伴う実践的教育訓練が中心とされるべきであり、技術的能力と同様に資質と知性の育成が教育・訓練において重視されるべきであると主張している⁵⁵⁾。

彼の批判のなかで「海軍幕僚評価」を考えるにあたっても関係ある点を、少し詳しくみていきたい。彼の批判は、海軍の教育・訓練の最初から、つまり、その入隊時期にも向けられている。兵学校の入校時期が10代半ばと早すぎ、規則に囲まれた抑圧的環境が早くから若者の独立性、創造性、自ら考える能力を委縮させてしまう⁵⁶⁾。それ以後の諸施設での教育・訓練においても傾向は同じで、その内容も海軍士官としての実践的知識とは遠い専門技術面に偏重しており、試験重視、暗記中心の詰め込み教育の形態は思考力の育成を妨げている。

53) 海軍の教育・訓練等に対するデュワールの批判や改革の提言は、彼の自伝の中の至るところにみられるが、特にその第25章「改革の基礎（Basis of Reform）」において集中的に述べられている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 14-26, 43-47, 57-65, 79-80, 94, 102-103, 109-12, 122-24, 129-33, 152-54, 163-64, 184, 204, 207-208, 212, 225-26, 232, 254-56, 259-60, 270-71, 274-75, 278-81, 284-86, 293-295, 355-67.

54) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 248-49.

55) Dewar, *Navy from Within*, pp. 361-65.

56) *Ibid.*, pp. 14-19, 358.

また教育施設外の訓練でも、単調な日常的任務に没入するばかりで、責任ある任務が与えられていない。この結果、自ら判断し行動するという積極性・自発性や自立心が涵養されずに、ただ規則や命令に服従するだけの、受動的で、柔軟な知性に乏しい、習慣的に変革と自主的思考へ反感を感じるような保守的な士官が生み出されている。海軍に入ってから28歳に至るまでの間に公式な海軍教育の期間が11年も存在し、責任ある海上任務にはおよそ2つしか就くことができない。長すぎる専門技術偏重の教育・訓練は早期に実践経験を得る機会を奪い、かえって海軍士官に不可欠な資質・能力と知性の涵養を阻害し、経験不足ゆえの海上任務での危険と非効率率をもたらしている⁵⁷⁾。

以上のような教育・訓練の在り方は、上官・命令への盲目的服従と上意下達を軸とした過度の中央統制を特性とする海軍組織を生み出すことにつながっている。そして、上官への意見具申が反抗的態度とみなされ報復的措施によって報われるという海軍の組織風土は、改革の実現を阻害するものである⁵⁸⁾。

海軍組織における過度の中央統制は下級指揮官への権限移譲を妨げ、もとより教育・訓練によって下級指揮官にも積極性・自発性が育成されていないので、結果として柔軟な戦術展開は不可能である。この海軍の組織および教育・訓練の本質的特性とその所産である士官たちと共存する戦術思想が、単縦陣での並航戦という硬直した艦隊戦構想である⁵⁹⁾。情報を独占して最高指揮官が独断専行する中央統制の強い指揮統制形態と、下級指揮官の裁量と自発性を認めない単縦陣での並航戦という戦術思想は相互に結合した存在なのであった。

デュワーは、敵艦隊が、特に劣勢のそれが自軍の思うように単縦陣での

57) *Ibid.*, pp. 293, 358-59.

58) *Ibid.*, pp. 225-26, 249, 258; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, p. 58.

海軍における法と処罰の執行についても海軍教育において知らしめられるべきとデュワーが述べるのは、ロイヤル・オーク事件の経験も影響しているのかもしれない。Dewar, *Navy from Within*, pp. 130, 357.

59) デュワーの艦隊戦戦術についての見解は下記を参照。Dewar, *Navy from Within*, pp. 122-24, 133-38, 204-205.

並航戦を採用するはずはないので、硬直した単縦陣での艦隊戦闘ではなく、1805年のトラファルガー（Trafalgar）海戦にみられるような、一個の艦隊を数個の部隊に分け、下級指揮官も権限をもって各部隊を指揮し、そのような各部隊が独立的かつ有機的に共同戦闘を展開する分艦隊戦術を適切なものと主張した。それを実現するためにも、下級指揮官の自発性・積極性を圧殺し、最高指揮官のもとにすべてが集中される過度の中央統制を生み出す海軍の教育・訓練の在り方が変えられねばならないのであった。

また、参謀組織の不備も、デュワールの批判点だった⁶⁰⁾。海軍の高級指揮は参謀組織の欠如、また欠陥によって損なわれているが、情報を上官が独占し、その上官がすべてを独断的に指令するという過度の中央統制の下で、上官の有する情報と権限を分有してこそ効果的に機能する参謀組織は育成されえない⁶¹⁾。

たしかに第一次世界大戦前から海軍参謀部の編成・整備がなされていたが、中央統制の強い組織のなかでは、独断専行の立場にある軍令部長など高級指揮官に些細な問題も含めて多大な業務が集中する。そうした状態に圧倒されて、さらなる作業量の増加を意味する改革の方策の実施に自然と反発する傾向が海軍省に生じ、それが護送船団方式採用への抵抗の背景となったのではないか⁶²⁾。また、中央統制に慣れて、日々の業務に没入専心するのみの士官たちでは、大局観をもちえず、先を見すえて戦争計画を構想することはできない。参謀部はあっても、それに適切な資質を有する参謀の適材が育成されておらず、その機能的活動が阻害されている。デュ

60) デュワールの参謀組織関連についての見解は下記を参照。*Ibid.*, pp. 102-103, 139-43, 152-54, 157-58, 170-71, 183, 229, 248-50, 258-59, 261-62.

兄のアルフレッド・デュワールは、ドイツの参謀本部組織について詳しく、その導入支持者だった。アルフレッドとケネスのデュワール兄弟は、教育や組織の問題について、陸軍改革で知られる政治家・哲学者のホールデン（Richard Burdon Haldane）と彼の邸宅で語り合っていたという。*Ibid.*, pp. 139-40.

61) たとえば、アガディール危機のときに軍令部長であったウィルソン（Arthur Knyvet Wilson）元帥は、1900年代半ばに海峡艦隊司令長官を務めたが、部下と情報共有や協議をすることなく、その副司令官のムーア（Arthur William Moore）中將にも作戦計画について何も語っていなかったという。*Ibid.*, p. 75.

62) *Ibid.*, pp. 227-28.

ワーによれば、「ワインがなければ、瓶は役には立たない」のであった⁶³⁾。改良されていったとはいえ、第一次世界大戦を通して参謀組織の機能は満足なものではなく、その改善には海軍の教育・訓練の改革が必須だとデュワーは感じていた⁶⁴⁾。

専門技術面ばかりが重視されて、戦史研究に基づいた作戦・戦略面の教育が貧弱であることも、適切な海軍戦略や戦術構想の実現を阻害している⁶⁵⁾。実際、デュワーの批判と変革の主張は戦略面にも及び、第一次世界大戦を前にして、彼は対独戦略として遠隔封鎖 (Distant Blockade) を提言している⁶⁶⁾。第一次世界大戦前のイギリス海軍の対独戦略の基軸はドイツを海上封鎖して圧迫するというものであった。しかし、機雷や魚雷という水雷兵器の実用化と進歩が著しい状況下に、ドイツ海岸近くに進出しての近接封鎖 (Close Blockade) はあまりにも危険が大きいため、第一次世界大戦が近づくにつれてイギリス海軍の対独戦略は、近接封鎖や、もう少し距離を置いた、いわゆる監視封鎖 (Observational Blockade) から、大戦直前にはスコットランドとノルウェー間、そして英仏海峡を封鎖して北海にドイツを封じ込めるという遠隔封鎖策へと移行していった⁶⁷⁾。デュワーの王立防衛研究所1912年金賞論文は、この遠隔封鎖を主張するものであり、イギリス海軍によるその採用と何らかの関係があったのかもしれない⁶⁸⁾。デュワーは、ドイツ方面に近づいての封鎖よりも、北海の出入口を

63) *Ibid.*, p. 229.

64) *Ibid.*, pp. 248-50.

デュワーは、第一次世界大戦後の海軍省の官僚主義的非効率にも批判的で、その職務権限の不明確、部署の機能や業務割当の重複、人材配置の不适当、それゆえの決定の遅さなどを批判し、海軍軍人と民間事務官の役割分担の明確化や部局再編による効率化、また業務習熟のための海軍省勤務期間の長期化という改革を自伝で主張している。*Ibid.*, pp. 298-306.

65) *Ibid.*, pp. 123, 129-33, 262. cf. Lambert, "The Naval War Course," pp. 248-49.

66) デュワーの遠隔封鎖構想については下記を参照。Dewar, *Navy from Within*, pp. 144-52, 371-81.

67) 通説の1914年7月ではなく、グライムスは遠隔封鎖への移行を、それより早期であるとしている。Shawn T. Grimes, *Strategy and War Planning in the British Navy, 1887-1918* (Woodbridge: Boydell Press, 2012), pp. 177-79.

68) Dewar, *Navy from Within*, pp. 150-51; Grimes, *Strategy and War Planning*, pp. 179-81. 自伝においてデュワーは、海軍のとった遠隔封鎖策は自らの構想を模したものだと言っている。

封鎖して自国の通商路を防護しつつ敵経済を圧迫する防御的戦略、つまりは遠隔封鎖こそ、敵艦隊を艦隊決戦に誘い出す方法だと考えていた⁶⁹⁾。敵主力艦隊はまた、その潜水艦による通商破壊戦を背後から支える存在でもあると彼は認識していた⁷⁰⁾。

以上のようなデュワーの考察と主張は、たとえば教育・訓練面での欠陥や、それによる下級指揮官の自発性・積極性の欠如、参謀組織の不備、過度の中央統制や装備・技術面への偏向に対する批判等、多くがリッチモンドやドラックスなど他の「青年トルコ人」たちの主張と重なるものである⁷¹⁾。しかし、とりわけデュワーは、それを「海軍幕僚評価」において強く表明する機会をもつことになったのであった。

2. ジュトランド海戦とジュトランド論争

「海軍幕僚評価」を検討する前に、まずはジュトランド海戦とジュトランド論争の展開について概観したい。

A. ジュトランド海戦の概要

戦力的に劣勢なドイツ海軍が1916年5月末にイギリス海軍の一部戦力を誘引してその撃破を図ろうとし、主力艦隊である大海艦隊 (Hochseeflotte) を出撃させたことでジュトランド海戦は誘発された⁷²⁾。その意図は不明な

69) Dewar, *Navy from Within*, pp. 147, 372; idem, "What Is the War Value of Oversea Commerce?," pp. 457-60.

70) Dewar, *Navy from Within*, p. 235.

71) [Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Drax], "Jutland or Trafalgar," *The Naval Review* 13-2 (May 1925); Davison, "Striking a Balance," pp. 54-55; Hunt, *Sailor-Scholar*, chaps. 1-2. デュワーは自らの教育・訓練に関する考えの多くが、リッチモンドの主張と重なるものだとしている。Dewar, *Navy from Within*, p. 355.

72) ジュトランド海戦の展開については主に下記を参照。John Brooks, *The Battle of Jutland* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016); Julian Stafford Corbett, *Naval Operations*, vol. 3 (London: Longmans, 1923); Andrew Gordon, *The Rules of the Game: Jutland and British Naval Command* (1996; London: John Murray, 2005); Arthur Jacob Marder, *FDSF*, vol. 3: *Jutland and After, May to December 1916*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1978).

がらドイツ艦隊の出撃を探知したイギリス海軍も、主力艦隊である大艦隊を出撃させたのである。5月31日午後には艦隊前衛である両軍の巡洋戦艦隊がデンマーク沖で接触して海戦は開始されるが、英独ともに敵艦隊主力である戦艦隊の存在を予期しておらず、英独主力艦隊同士の衝突は予想外のものであった。

ジュトランド海戦の展開は、以下の4段階に分けることができる。

「南への追撃 (Run to the South)」: 5月31日午後2時20分ごろに両軍は接触し、ビーティー中将の指揮する優勢なイギリス海軍巡洋戦艦隊がヒッパー (Franz Ritter von Hipper) 中将率いるドイツ巡洋戦艦隊を追撃する。後退する独巡洋戦艦隊は、後方の主力戦艦隊への英巡洋戦艦隊の誘引を企図していた。英巡洋戦艦隊が追撃に入る際、臨時に戦艦隊から巡洋戦艦隊に編入されていたエヴァン・トーマス (Hugh Evan-Thomas) 少将率いる第5戦艦戦隊の転針が遅れ、ために英巡洋戦艦隊の戦力集中は不完全なものとなった。この「南への追撃」の段階で英巡洋戦艦インディファティガブル (HMS Indefatigable) とクイーン・メリー (HMS Queen Mary) が相次いで爆沈する。

「北への後退 (Run to the North)」: ドイツ巡洋戦艦隊を追撃するイギリス巡洋戦艦隊は、午後4時30分ごろにシェーア (Reinhard Scheer) 中将率いるドイツ大海艦隊主力である戦艦隊を発見する。英巡洋戦艦隊は即座に反転して自軍主力の戦艦隊のもとへ大海艦隊を誘引しようとした。英巡洋戦艦隊は、いまや優勢なドイツ大海艦隊の追撃を受けることになったが、このときも第5戦艦戦隊は転針が遅れたために、敵の激しい攻撃下に陥ることになった。

英独主力戦艦隊の会敵: イギリス巡洋戦艦隊を追撃してきたドイツ大海艦隊は、ジェリコー大將率いるイギリス大艦隊主力の戦艦隊と午後6時ごろに接触する。大艦隊戦艦隊は戦闘隊形である単縦陣へと展開するが、それにあたり、より敵に接近する形となる西寄りの右翼先行展開ではなく、利点も多いが敵に遠ざかる形となる左翼先行展開をおこなって戦闘を開始した。劣勢となった大海艦隊は離脱を図り、大艦隊がそれを追撃する。英巡洋戦艦インヴィンシブル (HMS Invincible) が爆沈。追撃するジェリ

コーは、脱出を図るドイツ大海艦隊の雷撃に対し大艦隊を退避させるなど慎重な艦隊指揮をおこなった。なお、午後7時ごろに巡洋戦艦隊が360度旋回（32 point turn）をなしたことも、のちのジウトランド論争の一争点となる。

夜戦：夜戦を避けつつ、翌日の戦闘再開を期してイギリス大艦隊はドイツ大海艦隊を追跡する。軽艦艇による戦闘が断続的に生じるも、結局、大海艦隊は大艦隊の後方をすり抜けてドイツへの帰還を果たした。

この海戦ではイギリス海軍の損害の方が大きく、巡洋戦艦3隻を含む各種14隻、戦死6094名など。ドイツ側の損害は巡洋戦艦1隻を含む各種11隻、戦死2551名であった。しかし、イギリス海軍はドイツ海軍主力を撃滅できなかったとはいえ、北海にドイツ海軍が閉塞される戦略状況とイギリスの海上優勢に変化は生じなかった。

B. ジウトランド論争

第一次世界大戦中よりイギリスでは大戦の公刊戦史作成の動きが始っており、帝国防衛委員会（Committee of Imperial Defence）の指示のもと、その海軍戦史部分である『海軍作戦（*Naval Operations*）』⁷³⁾が海軍史家コーベットにより著述され、大戦終結後に順次刊行されていくことになった。1914年末のフォークランド（Falkland Islands）沖海戦までをあつかう第1巻が1920年に、ダーダネルス攻撃などをあつかう第2巻が翌年に刊行され、次いでダーダネルス作戦とジウトランド海戦をあつかう第3巻が準備されることになった。

海軍省においても、大戦の戦訓を抽出して海軍の専門的要請に応えるべく、独自の戦史記録・研究文書が1919年以降に順次作成されていく。その作業の一翼を担ったのが、ケネス・デュワーの兄アルフレッドの提案により、大戦終結後の1918年に士官教育に資する大戦の史資料を作成するため

73) Julian Stafford Corbett, *Naval Operations*, vol. 1, 2 (London: Longmans, 1920, 1921). 1922年のコーベットの急死後、1923年に第3巻は出版された。その後、事業を引き継いだヘンリー・ニューボルト（Henry John Newbolt）により、1928年に第4巻が、1931年に第5巻が刊行された。

訓練・幕僚業務課への設置が承認された戦史班 (Historical Section) であった⁷⁴⁾。そこで作成される資料は、高級将校や教育・訓練部門による部内での使用を目的とし、基本的に批評的な内容をもつものではなかった。しかし、この流れの中から、大いに批評的内容をもつ「海軍幕僚評価」が生み出されることになった。

また、それら部内利用のための大いに専門的な資料とは別に、一般公開を前提としたジウトランド海戦記録の作成も進められることになった。ジウトランド海戦には早くから議会や社会の関心が強く向けられてきており、その公式記録作成と公表が求められていたのである⁷⁵⁾。

1919年2月に軍令部長ウィームズからハーパー大佐に、各種文書資料のみに基づいた、批判や解釈を含まないジウトランド海戦記録の作成が指示された。このいわゆるハーパー・レコード (Harper Record) は10月には完成したが、このころ新たに軍令部長に就任したビーティーがその内容に修正を求め、これにハーパーが抵抗して、その最終的完成の目途がたたなくなった。ために1920年9月にはハーパー・レコードの公表は断念され、

74) 海軍省における第一次世界大戦の戦訓研究は、技術分野の研究 (Technical History) と幕僚分野の研究 (Naval Staff History) の種別があった。後者は海軍省の訓練・幕僚業務課戦史班が管轄し、いずれも退役軍人であるアルフレッド・デュワー、オズワルド・タック (Oswald Thomas Tuck)、ロイド・オーウェン (J.H. Lloyd-Owen) が、その主な担い手であった。Alfred Charles Dewar, "The Necessity for the Compilation of a Naval Staff History," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 66-463 (Aug. 1921), pp. 374-77; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 112; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, pp. 60-61.

第一次世界大戦以前より海軍部内に史資料を取り扱う部局を設置する動きは存在した。海相チャーチルの提案から1914年に海軍参謀部の戦史班 (History Section of the Naval War Staff) が設置されることになったが、大戦勃発という緊急事態下に実体化せず、結局、2名の海軍士官がコーベットにより著作される公式海軍大戦史のための史資料収集を帝国防衛委員会のもとでおこなうことになった。Peter K. Kemp, "War Studies in the Royal Navy," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 111-642 (May 1966), pp. 151-52.

75) ジェリコーによる回顧録『大艦隊 (The Grand Fleet, 1914-1916: Its Creation, Development and Work [London: Cassell, 1919])』の執筆を知った軍令部長ウィームズが、それによるジウトランド海戦にまつわる問題の惹起を懸念したことも、海軍省が公式記録作成に動いた背景にあった。Alfred Temple Patterson, *Jellicoe: A Biography* (London: Macmillan, 1969), p. 230.

それは『海軍作戦』第3巻を執筆するコーベットの資料として提供されることになった。なお、1920年12月には『ジウトランド海戦1916年5月30日～6月1日：付録付公式文書集（*Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*）』⁷⁶⁾が公表されたが、これはジウトランド海戦に関わる報告書や航路図、信号記録などを集成したものにはすぎなかった。

ハーパー・レコードが挫折する一方、海軍省では「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」の作成が進められることになった。1920年11月に海軍省の訓練・幕僚業務課長エラートン（Walter Maurice Ellerton）大佐を通して、この作業を指示されたのがケネス・デュワールの兄であるアルフレッド・デュワー大佐〔退役〕であった⁷⁷⁾。ケネス・デュワーによれば、兄アルフレッドが「海軍幕僚評価」の作成を依頼されたのは、オックスフォード大学で歴史学を修め、またドイツに詳しいという彼の素養ゆえにであった⁷⁸⁾。しかし、その兄でも砲術や戦術の問題に満ちたジウトランド海戦を扱うのは難題に感じられたため、その分野に見識深い弟ケネスに助力を求めたというのである。このデュワー兄弟の「海軍幕僚評価」編者としての選定は、軍令部次長のブロック（Osmond de Beauvoir Brock）中將によりなされたが、そこにはビーティーの意向が働いていたようである⁷⁹⁾。「海軍幕僚評価」の作成作業には、ハーパー・レコードの作成に参加したジョン・ポーレン（John Francis Hungerford Pollen）大尉も

76) *Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*, Cmd. 1068 (H.M.S.O., 1920).

77) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxii.

78) Dewar, *Navy from Within*, pp. 265-66, 267. デュワーによれば、ハーパー・レコードが未公表となったのは、一般人には理解不能な内容であったためだという。

79) Stephen Wentworth Roskill, *Admiral of the Fleet Earl Beatty: the Last Naval Hero: An Intimate Biography* (London: Collins, 1980), p. 332.

ハントによれば、ハーパー・レコードの図表資料の全面的再検討に取り組むべくケネス・デュワーが選任されたが、それは皮肉にもコーベットの推薦によるものであった。そのときコーベットは、「海軍幕僚評価」につながったハーパー・レコードの全面的見直し作業の進行には気づいていなかったという。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 114; Donald Mackenzie Schurman, *Julian S. Corbett 1854-1922: Historian of British Maritime Policy from Drake to Jellicoe* (London: Royal Historical Society, 1981), p. 190.

加わった⁸⁰⁾。作業は秘密裏に進められるはずであったが、この企画はすぐ新聞に知られるところとなっている⁸¹⁾。

「海軍幕僚評価」の作成作業は1921年8月までには実質的に終了したが、その内容があまりにジェリコーに批判的と感じられたために修正が求められた⁸²⁾。校正作業等もあって、その完成は同年12月となり、翌年2月に校正刷り100部が印刷され、秘密文書とされた⁸³⁾。当初、この「海軍幕僚評価」には完全版と、いくつかの批評部分を削除した艦隊版 (Fleet Edition)、さらに批評を抑えた一般公開版の3種が構想されていた⁸⁴⁾。しかし、修正を経たとはいえ、やはり「海軍幕僚評価」はジェリコー批判を多く含んでおり、海軍部内での不和促進の恐れから公表は断念され、回収されることになった。

1922年にコーベットは急死したが、ジウトランド海戦を叙述した『海軍作戦』第3巻の原稿は完成しており、彼の死の翌年に出版された。しかし、この内容に海軍省は不満を示し、「その著作や記述の正確性については、いかなる責任も負わない」うえに、海軍省の見解と「本書で提唱され

80) ジョン・ポーレンは射撃管制装置の発明で知られるアーサー・ポーレン (Arthur Joseph Hungerford Pollen) の甥にあたる。'John Francis Hungerford Pollen,' *The Dreadnought Project*, <http://dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/John_Francis_Hungerford_Pollen>. アーサー・ポーレンは、自らの射撃管制装置の全体的採用がなされなかったことから海軍省に批判的で、ジェリコーに対しても同様であった。彼は、ビーティー夫人エセル (Ethel Newcomb Beatty) を通してビーティーともつながっていた。From his wife, 12 May 1917, in *The Beatty Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Beatty* (hereafter cited as BP), vol. 1, ed. Brian Ranft (Aldershot: Scolar Press, 1989), p. 242; Davison, *Challenges of Command*, p. 429. cf. Arthur Joseph Hungerford Pollen, *The British Navy in Battle* (New York: Doubleday, Page, 1919).

81) Roskill, *Earl Beatty*, p. 332; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxii.

82) Roskill, *Earl Beatty*, p. 333.

83) Dewar, *Navy from Within*, p. 266; Roskill, *Earl Beatty*, p. 333; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiii. デュワーは自伝では「海軍幕僚評価」の最終的完成を1922年1月としている。

印刷された「海軍幕僚評価」100部のうち、現存が確認されているのは、No.1、2、4、7のみである。それらの事情については下記が詳しい。Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 294-97.

84) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiii.

ているいくつかの原則、特に決戦を求めて決着を強いることの重要性を軽視する傾向は、直接に対立する」との但し書きを挿入させている⁸⁵⁾。

ジュトランド海戦公式記録の問題はビーティーをはじめとする海軍省を悩ませる難問となったが、最終的に『ジュトランド海戦報告』が1924年に公表されることになった⁸⁶⁾。これは、ケネス・デュワーの監督下に、批評部分はとり除くが、なるべく原形をとどめるようにと命令されてジョン・ポーレン少佐〔退役〕が「海軍幕僚評価」を修正したものだった⁸⁷⁾。『ジュトランド海戦報告』は公表前に、当時、ニュージーランド総督となっていたジェリコーのもとに事前確認のため送付されたが、彼の強い反発を招いた。ジェリコーからの数多くの批判点に対し、海軍省は、再反論も注記した上でそれを付録G章（Appendix published by request of Lord Jellicoe）として併録するかたちで『ジュトランド海戦報告』を出版した⁸⁸⁾。

こうして海軍省によるジュトランド海戦公式記録はついに公表されたが、その後もジュトランド論争は収束しなかった。たとえば、1925年にベーコン（Reginald Hugh Spencer Bacon）大將は『ジュトランド・スキャンダル（*The Jutland Scandal*）』を著してジェリコーを弁護し、ビーティーを批判している⁸⁹⁾。特に1927年に出版されたチャーチルの『世界の危機（*The World Crisis*）』第3巻は、ジェリコーよりビーティーを評価する傾

85) Note by the Lords Commissioners of the Admiralty, in *Naval Operations*, vol. 3, Corbett, 1st ed., front endpaper; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 193-94. コーベットの『海軍作戦』第3巻については下記も参照。Andrew Lambert, “Writing the Battle: Jutland in Sir Julian Corbett’s ‘Naval Operations’,” *The Mariner’s Mirror*, vol. 103-2 (May 2017).

86) ビーティーは、ジュトランド海戦の公式記録問題を、多くの利害関係が絡むだけに解決が困難な悩ましい問題だと感じていた。To his wife, 6 Mar. 1923, in *BP*, vol. 2, ed. Brian Ranft (Aldershot: Scholar Press, 1993), p. 242.

87) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, in *BP*, vol. 2, pp. 454-55; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxv.

88) 拙稿「ジュトランド論争とジェリコー」（『国際学論集』第25巻1・2号、2014年12月）、19～20頁。Appendix G: Appendix published by request of Lord Jellicoe, *Narrative*, pp. 106-13.

89) Reginald Hugh Spencer Bacon, *The Jutland Scandal*, rev. ed. (1925; London: Hutchinson, 1933).

向の強いものだが、ジュトランド海戦で第5戦艦戦隊司令官だったエヴァン・トーマスによるビーティー批判を惹起し、論争を再び活発化させた⁹⁰⁾。同年に退役したハーパーも『ジュトランド海戦の真実 (*The Truth about Jutland*)』を出版し、ビーティーを批判している⁹¹⁾。さらには、この動きに刺激されたのか、海軍省もハーパー・レコードの公表に踏み切った⁹²⁾。

1927年にビーティーは海軍省を去り、替わってジェリコーと親しいマッデン (Charles Edward Madden) 元帥が軍令部長に就任した。そして、この情勢変化の下、海軍省は1930年に「海軍幕僚評価」の全廃棄を決定する⁹³⁾。1920年代を通して、「海軍幕僚評価」が大きな影響を及ぼしたジュトランド論争は、消長しつつも、その関係者たちから離れることがなかったのである⁹⁴⁾。

90) 拙稿「ジュトランド論争とビーティー」(『軍事史学』第50巻第3・4合併号、2015年)、203頁。Winston Leonard Spencer Churchill, *The World Crisis*, vol. 3, pt. 1 (London: Butterworth, 1927).

91) John Ernest Troyte Harper, *The Truth about Jutland* (London: John Murray, 1927).

92) Reproduction of the Record of the Battle of Jutland, Command Paper 2870, 1927.

93) Dewar, "Battle of Jutland," III, p. 146; Roskill, *Earl Beatty*, p. 334; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiv.

94) ジュトランド論争の記憶は長らく尾を引いたようで、その影響は戦艦アンソンとハウの改名にもみられる。1930年代半ば以降に建造が開始されたキング・ジョージ5世 (HMS King George V) 級戦艦の4番艦アンソン (HMS Anson) と5番艦ハウ (HMS Howe) は、当初それぞれジェリコーとビーティーという艦名が与えられていたが、1940年に海相であったチャーチルがジュトランド論争を思い起こさせる名は望ましくないとしたために、改名されたのである。Nicholas Jellicoe, *Jutland: The Unfinished Battle* (Barnsley: Seaforth Publishing, 2018), p. 356.

ウラジミル・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著
『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公(1904~1918年) 短い評伝』

広 野 好 彦

Vladimir Mikhailovich Khrustalev, *Naslednik tsesarevich i velikii kniaz Aleksei Nikolaevich (1904-1918), Kratkii biograficheskii ocherk*

HIRONO YOSHIHIKO

ウラジミル・ミハイロヴィチ・フルスタリョフ著『皇太子アレクセイ・ニコラエヴィチ大公(1904~1918年) 短い評伝』(モスクワ、2017年)は、ロマノフ王朝最後の皇帝ニコライ2世の長男であるアレクセイ・ニコラエヴィチの評伝である。もっとも評伝というより、パンフレットと言った方が正確かもしれない。八つ折り版、全71頁、その中には37枚の写真が掲載されているが、それを順次眺めているだけでも、アレクセイの成長ぶりがよく理解できる。また付録として、アレクセイ日記の断片(1918年1月22日~3月28日:露暦)とアレクセイが友人のコーリャ・デレヴィエンコに宛てた書簡4通(1918年4月~5月)が収録されている。

この著書の手法は、史料をして語らせることに尽きる。アレクセイの父であるニコライ2世、母であるアレクサンドラ皇帝をはじめ、アレクセイの身近な人物の日記、回想録、証言などを、基本的には時系列的に並べたものである。精選されたものであることは理解できるが、引用史料などの背景についてはあまり語られず、さらに歴史的事実を正確に確定するという面ではあまり力が入れていない。

アレクセイ・ニコラエヴィチは、1904年7月30日、ペテルゴフにおいて、ニコライ2世とアレクサンドラの第5番目の子供、初めての男子とし

て生まれた。皇帝継承が男系に限られるので、長らく待ち望まれた世継ぎの誕生は歓迎されて、8月11日に洗礼式が行われたことも詳細に述べられる。

生誕が長らく待たれた世継ぎの男子ではあったが、皇太子アレクセイは血友病であった。この病気は男子にのみ発現するが、その遺伝は母親を通じるものである。遺伝の流れは、母親であるアレクサンドラ皇后、祖母にあたるヘッセン・アリサ大公妃、さらに曾祖母にあたるイギリス・ヴィクトリア女王までたどることができる。

血友病を病むものは、何かしら些細な原因で傷を負い、出血が止まらない場合、死に至ることがある。それゆえに、アレクセイは、おとなしい子供のイメージが強い。しかしこの評伝では、別の面も描かれる。アレクセイは快活な子供の面があることも示される。その例として、3から4歳ごろ、アレクセイが皇帝主催の食事会に闖入して、無遠慮に客と会話をおこない、さらにはテーブルの下にもぐりこみ女官の靴を奪い取り、靴の中にイチゴを入れるいたずらをしたために、皇帝に叱られ、食事会から放逐されたというほほえましいエピソードが語られている。しかしこのわんぱくな少年が、日常生活の偶発的な事情により、出血し、そしてそれが止まらなくなり、それとともに尋常ではない痛みが発生し、少年が泣き叫ぶと事情が一変する。

これに関して1912年、皇太子8歳のときの、ポーランドにある皇帝の狩猟場スパラにおける有名な事件が語られている。皇太子はボートを係留させようとして、足に力を入れ鼠径部に内出血が生じたのであった。皇太子には3人の医師が付いていて、あらゆる手段が講じられたが、出血は止まらなかった。皇太子は危機的な状態にあるが、誰もなすすべがなく、最悪の場合を考えて死亡広告の準備もなされた。その中、ラスプーチンの電報が届いた。それには「皇太子の健康は回復し、彼はすぐに痛みから解放される」とあった。そしてその日には出血が止まったというのである。この有名なケースに対する解釈はさまざまであるが（私は、ラスプーチンの電報が到着して、皇太子の出血が止まったのは、単なる偶然であると考えている）、この著書では断定はしていない。次のように簡潔にまとめるだけ

である。

「両親の絶望、息子の回復に対する奇跡的力への期待、これらのことが、Γ.E.ラスプーチンをして、皇帝一家に接近することを可能とした。このことは、後に家族の信用を落とすために用いられた。

現代の歴史家は、今までのところ、グリゴリー・ラスプーチン現象と彼の行動に対する影響力について論争をしている。

息子の病気が、母親の行動、願い、考えを予め定めた。毎年、息子の命、皇太子アレクセイの病気との戦いが、彼女の健康、精神力を奪ったのであった。」（22頁）

翌1913年、ロマノフ王朝300周年記念の式典においても、アレクセイ皇太子の体調はひどかった。皇太子は、兵士の腕に抱えられながら運ばれていた。この様子を収めた写真が残されているが、この著書には収録されていない。皇太子が血友病であることは極秘であったが、この機会に、一般の目に病弱な皇太子の姿がさらされ、ロマノフ王朝の行方に不安を感じさせた。

その後第一次世界大戦が勃発する。ニコライ2世はこの中、モギリョフにある総司令部に、皇太子を連れて行くことを決断する。前線においては医療水準が落ちるために、皇太子の血友病を考えた場合、リスクを伴うものであった。しかし王朝の後継者を前線において可視化することが必要であると考えた。その一因にはロマノフ王朝300年祭のアレクセイの在り方が作用していると思われる。しかしこの著作はこのような父親サイドの考えについては言及がない。皇太子アレクセイの前線における滞在を楽しんでいる様子を表す書簡が数通引用されるだけである。その一つを引用しよう。

「モギリョフ、1916年10月1日

愛する私のママ

昨日、私たちのところで、セルビアの将軍ユリシッチ、公使、随員が正

餐を取りました。彼らは、パパのために銀のセルビアの軍事十字架をもたらし、私には『勇気のために』という銘がついた、金のメダルをもたらし。私は教師との戦いの中でそれに値したのです。小さなコーリャは熱心に勉強しています。神よ、母と姉妹を守りたまえ。期待しています。

さようなら。アレクセイ」(30頁)

この書簡では、アレクセイにとっては、得意でなかった勉強との戦いが、授与されたメダルに値するというユーモア感覚がみられる。また別の母宛て書簡では(1916年11月13日)、母親に対して、「私にお給料を送る時期ですよ。10回お願いします。」と記しているところが子供らしさを感じさせて、ほほえましい。皇太子は制約の多い宮廷の生活から離れて、自由と冒険を楽しんでいるのであろう。おそらくアレクサンドラ皇后もこのことは十分理解していた。

彼女は、愛するアレクセイの将来の治世のためにあらゆる努力を惜しまなかった。しかしその努力のあまり、周囲に盲目になった。このあたりも簡潔にまとめられる。

「皇后アレクサンドラ・フョードロヴナは、息子が成長すること、彼が力強い帝国の玉座に座るのを見ることを夢見た。『私達はベビーに、静かで、そして偉大な治世を残さなければなりません』。彼女は、夫に対して、第1次世界大戦期に書いた。母親としての本能のために、皇帝権力を壊すもの、将来の災厄に国家を導く全てに対して彼女は反対せざるを得なかった。執拗に政治的袋小路からの出口を探さざるを得なかった。彼女は、多くの人には理解できない、そして好まれなかった幻想の中に完全にいて、反対派の砲火を受ける最前線にいたのであった。」(31頁)

2月革命において、ニコライが、アレクセイではなく、ミハイル大公に譲位したのは、言うまでもなくアレクセイの健康状態、血友病に配慮したからである。著者は通例は史料に語らせるだけであるが、ここにおいては珍しく明確に史料解釈を補足している。

「フョードロフ教授がニコライ2世に対して、皇太子はすぐに家族から切り離され、両親が将来の立憲君主の養育に影響が及ばないとする知らせを伝えた後、初めて弟のために譲位するという決定に変更したのだ。いかなる親が、自らの非常に苦しんでいる息子を、悪意のあるものや全くの宣誓違反者の手に委ねて、確実な滅亡へと追いやることができようか？」
(33頁)

家庭教師ジリャールは、皇后から皇太子にニコライの譲位のいきさつを説明するよう依頼されている。

「－知っているでしょう。アレクセイ・ニコラエヴィチ、あなたのお父さんはもう皇帝であることを望んでいないのですよ。

彼は驚いたように私を眺め、私の顔から何が起きたかを読み取ろうと努めた。

－なぜ？ どうして？

－なぜならば、あなたのお父さんは、非常に疲れて、最近多くの重苦しいことに耐えたからですよ。

－そうですか。ママは私に言いました。私の父がここに帰ってきたい時、列車が拘束されると。しかしパパは、後でまた皇帝になるのですか？

私は彼にそれから説明した。陛下は、大公ミハイル・アレクサンドロヴィチのために譲位したのです。…

－しかしそれなら誰が、皇帝になるのですか？

－私は分かりません。今のところ誰もいません。

自分についての言葉は一言もなく、皇太子の権利についてのほのめかしもなかった。彼はひどく顔を赤らめ、興奮していた。少し沈黙してから、彼は言った。

－もしツァーリが、いないとすれば、誰がロシアを統治するのですか？

私は彼に次のように説明した。臨時政府が形成され、それが立憲会議の招集されるまで政治を行うであろう。そしてその時、ひょっとしたら、彼

の叔父ミハイルが帝位につくかもしれない。私は今一度この少年の自制心に打たれた。」(35-36頁)

こののち皇帝一家は、ツァールスコエ・セロー、トボリスク、エカテリンブルグで虜囚の生活を送り、最後はポリシェヴィキに殺害されることになる。この著書ではトボリスクにおける生活が集中的に描写される。少なくともトボリスクの生活の前半は、比較的自由が許され、給養体制もしっかりとしていた、悪くない生活であったからだろう。

皇帝一家はここで規則正しい生活を送った。ニコライに付き添った医師の息子は次のようにまとめている。

「トボリスクにおける両陛下の1日は、次のように行われる。全員午前9時に起き、午前のお茶の後に自分の課題に各自取り組む。皇帝陛下とオリガ・ニコラエヴナは読書、小さな子供達は勉強、皇后陛下は子供達に神学を教え続け、タチアナ・ニコラエヴナとともに朗読を行った。11時に、皆は散歩ために囲まれた土地に出た。午後1時に、昼食が行われ、その後またぞろ4時まで散歩。4時に午後のお茶が供される。お茶の後に、課業と手芸がまた行われ、他方、アレクセイ・ニコラエヴィチは、2時間ほど遊びで過ごす。7時半に正餐が出され、その後両陛下と正餐と昼食を共にした随員は、夜に止まる。そこにおいてはカードとドミノ遊びが行われる。掛け金は当然のことなし。しかも、毎晩、皇帝陛下は、朗読をする。主として古典作品の何かである。アレクセイ・ニコラエヴィチだけがいない。なぜならば正餐後に、寝に行くからであった。」(38-39頁)

冬期には庭に雪の山を作り、そりで滑るなど荒っぽい遊びもおこなわれた。それにはアレクセイは参加することはなかったであろうが。

この期間、皇帝一家はかつての女官アンナ・ヴィルボヴァとも連絡を取り合っていた。彼女は皇后と最も親しい女官であり、ラスプーチンと皇帝一家との間の窓口の役割を果たした。ツァールスコエ・セロー幽閉時に、彼女は、臨時政府により皇帝一家から離され、収監された。アレクセイの

アンナ（アーニャ）宛の書簡を引用する。

「トボリスク

1918年1月22日

親愛なる私の優しいアーニャ

あなたから便りをまたもらい、そしてあなたが私達のものを受け取ったと知りました嬉しくなりました。本日は零下29°で、風が強く太陽が出ています。散歩をしました。ブーツを履いて、庭の周りを歩きました。昨日は、タチアナとジリク（家庭教師ジリヤール：筆者注）と一緒に、フランス語劇を演じました。皆はさらに別の喜劇を準備しています。私たちのところには数人の素晴らしい兵士がいて、私は彼らと警備室において、チェスで遊びます。コーリヤ・デレヴィエンコは、祝日ごとに私のところに来ます。ナゴルヌイは、私とともに寝ています。セドネフ、ヴォルコフ、クルップ、チェルモドフは、私たちとともにおります。昼食に行く時間になりました。愛しています。主があなたを守らんことを。A.」（49頁）

ここにも記されているが、冬期の楽しみとして家庭劇が演じられて、アレクセイも役を演じるなど主体的にかかわった。

またこの著書では、皇太子の性格や勉学の様子に関する証言が種々集められている。その中においては、内戦期に皇帝一家殺害に関する調査を行っていた白衛軍調査官に対する証言が、皇帝一家に対する忖度の少ないものとして興味深い。例えば、トボリスクで家庭教師を務めていたビトネルは、皇太子の性格として、素朴さ、自己満足・横柄・傲慢がないことを挙げている。さらに恐ろしく忍耐強いことも指摘している。足が痛いはずなのに、決してそれを口に出さないということである。そして率直に次のように認める。

「勉強において、彼はひどくスポイルされていた。彼は読むことがひどく苦手で、自ら読むよりもむしろ読んでもらうことを好んだ。1時間彼は勉強することが難しかった。おそらくこのことは、彼の病気によって説明

がなされた。彼は読書が好きではなく、皇后はこの件において不安になっていた。彼女は子供時代読書が好きであった皇帝陛下の範例を基にしていたのであった。」(47-48頁)

私が最も印象に残ったのは、皇太子が犬と猫と戯れている写真である。あふれ出る皇太子の無邪気さが印象的であった。この著書では、皇帝一家がロシア正教会により殉教者と認められたということで結ばれているが、異教徒にある私にはあまりピンとこない。むしろ、私にとって救いになったのは、不確かなものではあるが、何気なく本文に挿入されている皇太子の飼い犬ジョイの運命であった。最後に引用しよう。

「1914年9月に撮られた一枚の写真には、ツァールスコエ・セローのアレクサンドル宮殿のバルコニーにおいて、スパニエル犬ジョイがポーズをとっている。後に、皇太子アレクセイとともにジョイは、モギリョフにおける軍事映画にさえ出演した。臨時政府とボリシェヴィキ時代、ジョイは、ツァールスコエ・セローからツァーリの家族とともに、初めはトボリスクに、そして後にはエカテリンブルクに行った。ウラルにおいて、皇帝一家が減んだ後、一部の情報によれば、スパニエル・ジョイは、白衛軍のおかげで、結局のところイギリスのジョージ5世のもとにいたということである。」(26頁)

Владимир Михайлович Хрусталеv, *Наследник цесаревич и великий князь Алексей Николаевич (1904-1918)*, *Краткий биографический очерк*, Москва, 2017.

会員業績

(2018年10月～2019年 9 月)

小 林 泉

- 論 文 (単著) “Japan’s Diplomacy towards Member Countries of Pacific Islands Forum”, *Asia-Pacific Review*, Vol.25 (Nov. 2018/11), pp.89-103.
- 評 論 (単著) 「APEC 首脳会議と太平洋島嶼国」、『パシフィック ウェイ』太平洋協会刊、153号 (2019年 2 月)、1 頁.
- 評 論 (単著) 「動き出した島嶼国への新政策」、『パシフィック ウェイ』太平洋協会刊、154号 (2019年 8 月)、1 頁.
- 冒頭講演 「太平洋の放置自動車について」、シンポジウム『深刻化する太平洋島嶼国の放置自動車』京都大学東アジア経済研究センター、於：京大東京オフィス、2018年11月12日.
- 基調講演 「太平洋島嶼地域の秩序変容」、シンポジウム『太平洋島嶼国の地域秩序の変容と日本の役割』一般社団法人平和・安全保障研究所、於：全国町村会館、2019年 1 月26日.
- パネラー 国際シンポジウム「島嶼国の水産振興」、海外漁業協力財団主催、於：三番町共用会議所、2018年10月19日.
- パネラー 国連フォーラム・ネットワーク・カンファレンス・セミナー「パプアニューギニアの持続可能な開発」、於：政策研究大学院大学、2019年 1 月 6 日.
- 発 表 “Impact of China’s expansion into the Pacific island countries”, *Asia-Pacific Security Dialogue in Taipei*, The Prospect Foundation, 2019 August 20.
- 調 査 カーボベルデ共和国、調査目的「日本の漁業援助評価」、2019年 2 月 2～11日.
- 調 査 ミクロネシア連邦・ボンペイ州、調査目的「科研基礎研究B」、2019年 3 月24～29日.
- 調 査 パラオ共和国、調査目的「科研基礎研究B」、2019年 9 月29日～10 月 2 日.

根 無 喜 一

- 講 演 「イギリスと Brexit」、岸和田ロータリークラブ〔泉州の明日を考える会〕、於：岸和田市沼町天神社会議場、2019年 9 月19日.

大阪学院大学国際学学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学国際学学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、国際学すなわち政治、経済および文化の国際的視野における研究を通じて、日本の進展と世界との交流に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学国際学論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で、本会の趣旨に賛同する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の事業に参加し、本会の機関誌その他の刊行物の配布をうけることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選を妨げない。
1. 会長 1名
 2. 副会長 1名
 3. 庶務委員 2名
 4. 編集委員 4名
- 第8条 会長、副会長ならびに委員は会員の選出とし、総長がこれを委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。
- 第12条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金、その他の収入をもってあてる。
- 第13条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。本連合に関する規程は別に定める。
- 第14条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。
- 第15条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認を得るものとする。

附 則

1. この会則は、平成2年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成5年4月1日に改正し、施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日に改正し、施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日に改正し、施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日に改正し、施行する。

以上

CONSTITUTION OF THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION OF OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

- Article I. The name of this association shall be the International Studies Association of Osaka Gakuin University, hereinafter referred to as ISA.
- Article II. The office of ISA shall be located in the library of Osaka Gakuin University.
- Article III. The purpose of ISA is to contribute to the development of Japan and its relations with the world, through research in international studies, that is, research in politics, economics, and culture from an international perspective, in accordance with the founding principles of this university.
- Article IV. ISA shall conduct the following activities:
1. Publish a journal, *International Studies: the Journal of the International Studies Association of Osaka Gakuin University*.
 2. Hold study meetings, lectures and forums.
 3. Other activities necessary to fulfill the objectives of the organization.
- Article V. Membership in ISA is open to:
1. Full-time faculty members of Osaka Gakuin University and Osaka Gakuin University Junior College who support the objectives of ISA.
 2. Any other person who supports the objectives of ISA and is approved by the Executive Committee.
- Article VI. Members are eligible to participate in ISA activities and receive the journal and other ISA publications.
- Article VII. The officers of ISA shall be a President, a Vice President, two executive secretaries, and four editorial staff. The term of office shall be two years, and reelection to office shall be permitted.
- Article VIII. The officers shall be elected by and from the membership of ISA, and commissioned by the Chancellor of the university.
- Article IX. The President shall represent ISA and supervise its affairs. The Vice President shall assist the President. The officers shall form an Executive Committee to administer the association and plan its activities.
- Article X. The President shall summon and preside over meetings of the Executive Committee.
- Article XI. The general assembly of ISA shall be held once every academic year. The President may also call special meetings when necessary.
- Article XII. The expenses of ISA shall be met by grants from Osaka Gakuin University, donations, and other income.
- Article XIII. Liaison with other academic societies shall be maintained through the *Federation of Academic Societies of Osaka Gakuin University (Osaka Gakuin Daigaku Gakkai Rengō)*.
- Article XIV. The fiscal year shall begin on April 1 of each year, and end on March 31 of the following year.
- Article XV. This constitution may be amended by motion at a general assembly, to be approved by the Chancellor.

大阪学院大学国際学論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は国際学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格者は、原則として本学国際学学会の会員に限る。ただし、次の場合は会員でない者も役員会の議を経て掲載することがある。
 - (1) 本会会員と共同執筆の者
 - (2) 本会会員の推薦がある者
 - (3) 本学大学院博士課程の院生で、指導教員の推薦がある者
3. 原稿用紙は本学の200字詰用紙を原則として横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。また、ワードプロセッサ等による原稿の取扱も字数においてこれに準ずる。
 欧文の場合は原則としてタイプ用紙に30行で30枚とする。
4. 原稿は、
 - ア. 論説
 - イ. 研究ノート
 - ウ. 資料
 - エ. 書評
 に区分して投稿し、いずれにも必ずレジюме（英語、独語、仏語のどれかに依るもの）を付けることとする。但し、外国語で書かれた論説・研究ノートの場合は、日本語のレジюмеも可とする。
5. 論説および研究ノートについて査読を行い、掲載の可否については編集委員会が決定する。なお、出版時には原稿受理および掲載決定の日付を明記する。
6. 発行は原則として、前期と後期の2回とし、6月、12月とする。年間ページ数は450ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、それを超えて希望する場合は編集委員会で超過分の額を決める。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成25年4月1日から適用する。

大阪学院大学国際学論集執筆要領

1. 原稿は最終稿とし、校正の段階でページ替えとなる加筆や削除をしない。
2. 邦文原稿の挿入欧文は、ワードプロセッサ等に依るか、明瞭な活字体で書くかする。
3. できるだけ現代かなづかいと常用漢字を用いる。
4. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
5. 脚注はまとめて本文の末尾に置く。
インデックス番号は上つきとして片括弧〔例・・・4〕を用い、通しナンバーとする。
6. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示する。説明文は別紙にまとめる。
7. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は、厚手の台紙に貼りつけて、希望の縮尺を記入すること。
8. 執筆者校正は2校までとし、何校目かを朱筆する。2校以前で校了してもよく、その場合は責了と朱筆する。
9. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるので特に注意されたい。
ア. 校正の際、内容に大きな変更を来たさないものの、やむをえず組み換えがなされたとき
イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわったとき
10. 原稿の提出期限は原則として3月末と9月末とする。
11. 原稿の提出先は編集委員宛とする。
12. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し出て受け取る。

以上

2019年度 大阪学院大学国際学学会会員 (2019年12月31日現在)

石川 武 敏	伊 田 行 秀	井 上 専	
S. ギニャール	黒 田 泰 司	小 林 泉	
N.M. シャクルトン	白 井 元 康	瀬 岡 誠	
瀬 川 真 平	永 田 雄次郎		(50音順)

大阪学院大学国際学学会役員

会 長	根 無 喜 一	編集委員	尾 崎 庸 介
副 会 長	広 野 好 彦		近 松 明 彦
庶務委員	中 則 夫		三 輪 信 哉
	松 本 芳 明		山 口 悟

執筆者紹介 (掲載順)

山 口 悟	(商 学 部 教 授)
広 野 好 彦	(国 際 学 部 教 授)

国 際 学 論 集

第30巻第1・2号

2019年12月31日 発行

発行兼編集者

大阪学院大学国際学学会

代表 根無 喜一

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号 phone 06-6381-8434(代)

印 刷

大枝印刷株式会社

〒564-0031 大阪府吹田市元町28番7号 phone 06-6381-3395

INTERNATIONAL STUDIES

VOL. 30, NO.1, 2

DECEMBER 2019

Contents

Article

- Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (1)
..... YAMAGUCHI SATORU — 1

Book Review

- Vladimir Mikhailovich Khrustalev, *Naslednik tsesarevich i velikii kniaz
Aleksii Nikolaevich (1904-1918)*, *Kratkii biograficheskii ocherk*
..... HIRONO YOSHIHIKO — 31

- Publications and News of the Members** 39

**THE INTERNATIONAL STUDIES ASSOCIATION
OF
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY**